

ふおーらむ

第 9 号



図書館サポートフォーラム

目 次

第 14 回「図書館サポートフォーラム賞」授賞式	2
--------------------------	---

挨拶：山崎久道 氏

表彰講評：水谷長志 氏

授賞のことば

稲葉洋子 氏

金沢幾子 氏

奥出麻里 氏

山内 明子「俳句八句」	10
-------------	----

恵光院 白「 ^{タスキ} 襷をかけないまゝで、走力の話しをしよう—愛される応援者の心得講座、赤熱ゼミナール—	11
---	----

今 まど子「戴冠式に参列して ウェストミンスター寺院にて—痛々しい王冠 救い給えと神に祈る— 今 日出海」	16
---	----

しゃれ神戸「失敗談」	18
------------	----

末吉 哲郎「近江さん天国へ旅立つ」	20
-------------------	----

平井 紀子「 ^{しぐれ} 時雨して—小唄漫遊記」	22
-----------------------------------	----

水谷 長志「情報と資料の次性を考えて—あらためてジョンソン博士の言葉を」	25
--------------------------------------	----

編集後記

第14回 図書館サポーターフォーラム賞授賞式

於／2012年4月9日(月)

喜山倶楽部 光琳の間(日本教育会館内9階)

評をいただくことにしまして、私の挨拶はここまでとさせていただきますと思います。本日はどうもありがとうございました。

2. 表彰講評

1. 挨拶

山崎久道氏

(図書館サポーターフォーラム代表幹事)

代表幹事の山崎でございます。お三方、本日はおめでとうございます。

図書館サポーターフォーラム賞は大変伝統がある賞でございます、本日ここにいらつしやいます末吉前代表幹事が発案し、十数回表彰を続けてきています。

この表彰式を迎えるに当たって、どういう人を表彰するかという基準について質問をたびたびいただきます。

1番目は社会的に価値のある図書館活動をなさった方で、社会に様々な形で貢献をされたり、図書館や読書の重要性を発信されたということで、過去に何人かの方が受賞されています。

2番目は図書館員の専門性を活かした非常に

緻密なお仕事をされてきた方で、たとえば書誌や索引などを作り、最終的には図書館サービスとして利用者提供に貢献されてきた方などが受賞されています。

3番目は国際的な活動をされてきた方で、例えば発展途上国の圖書の整備や振興のために自ら単身で海外に渡り図書館を立ち上げられた方とか、いろんな方がいらつしやいました。

こういった三つの社会的な貢献、図書館員の地道な専門性を活かす、国際的な活動を、目安として受賞を行ってきています。図書館界を見渡しても、こういった賞はほとんど無く、非常にユニークかつ社会的に意義がある賞といえると思います。

ここにお集まりの方はその趣旨にご賛同いただいた方ということで、そういった場にふさわしいお三方をお呼びできたのは大変嬉しく思います。

表彰内容についてはこの後表彰委員長から講

水谷長志氏

(表彰委員会委員長)

表彰委員長の水谷と申します。表彰についてご報告いたします。

今回は推薦によつて8件8名の方が表彰選考に挙がりました。この数は例年とほぼ同数であるのですが、今年も図書館員、あるいは図書館を外からサポーターするお仕事をされている方々の中から、とくに優れた業績をお持ちの方達でした。

正直な感想としては、今回受賞されるお三方に限らず、選考に挙がった人全てに表彰を受けていただきたかったというのが私の本音であります。

しかしながらこの図書館サポーターフォーラム賞というのは、表彰委員会の規定により上限3名ということになっておりますので、今回は2月23日に日外アソシエーツの会議室におきまし

て13名の出席幹事の投票と、3名の欠席幹事の投票で決めさせていただきました。

その結果選ばれたのが、こちらにお並びの稲葉洋子様、金沢幾子様、奥出麻里様のお三方となりました。

まず稲葉洋子さん。この3月に神戸大学附属図書館をご退職されましたが、その受賞理由を読み上げさせていただきます。

1995年1月17日の阪神・淡路大震災を機に神戸大学図書館は被災地の図書館の責務としてこの震災に関わるあらゆる資料を網羅的に収集する「震災文庫」を立ち上げ、一般公開した。

その発足から事業の中心的存在として陣頭指揮を貫徹し、網羅的収集・保管・保存からデジタルアーカイブの構築、そしてWebへの情報発信までをリードした功績は、2011年3月11日の東日本大震災以後のいわゆる震災アーカイブの先例となり、よきモデルを提示することにもなっている。このような「震災文庫」の今後の継続発展への期待をこめつつ、その意義を高く評価し表彰するものである。

先ほど山崎先生もおっしゃれましたが、ちょうど1年前の第13回図書館サポートフォーラム表彰式は、4.11すなわち4月11日だった

たんですね。まったく同じこの部屋で行われたわけなのですが、3.11から1ヶ月経った後だったにもかかわらず、余震が続いて表彰式中断せざるを得ず、非常に怖い経験をした記憶が鮮明に甦ってきます。

東日本大震災を記憶するプロジェクトというのは、今様々な形で進んでおり、そこに従事する人達はいずれも稲葉さんたちが神戸大学で展開した震災文庫を1つのモデルにして、その意志を継ごうとしているように思われます。

その意味で誠に先見の明があり、果敢かつ大胆な稲葉さんの仕事には、選考にあたったほとんど全ての幹事は一票を投じたように私は記憶しています。

私自身はこの会場からすぐ側の竹橋の国立近代美術館に勤めておりますので、当然のことながら国立の美術館とか博物館の活動については大きな関心があります。

稲葉さんは神戸大学でのお仕事長いわけですが、別な場で、例えば国立民族学博物館のサービス課長もされていたこともあります。

名館長であり、博物館のことを「博情館」と呼んだ梅棹忠夫さんの下でライブラリアンの仕事をされていたことも、前々から私は深い敬意を感じておりました。その意味で震災文庫の活動とともに、この点についても表彰しておきたいと思います。

お二人目は元一橋大学附属図書館に勤めておられた金沢幾子さん。その受賞理由についても、同じように読み上げさせていただきます。

1973年から2004年3月末日まで一貫して一橋大学の図書館員として勤務。経済学はもとより広く社会科学全般にわたる文献を知悉して、天野敬太郎の『河上肇博士文献志』を範としながら河上の先輩であり日本近代経済学のバイオニア的存在の福田徳三を対象とし、一橋での奉職の約30年のうちの20余年の歳月をかけて関係資料を博搜かつ綿密な考証を重ねて、対象人物の生涯に迫る、まさに「福田の伝記的書誌」を900ページに迫る大冊にまとめあげた。本書誌は福田研究に資するのみならず、社会科学文献書誌の理想形を示した点においても意義あることとして高く評価し表彰するものである。

書誌編纂を主たる業績としてこの図書館サポートフォーラム賞を受賞されたのは、昨年第13回の地方史文献の飯澤文夫さん、あるいは第11回の寺田寅彦書誌の大森一彦さん達がおられますけれども、それらの方々に続くのが金沢さんのお仕事だと思っています。

私自身は大学で図書館学を講義していますけれども、年々書誌の価値とか、その力を学生に教

えるのがとても難しくなっています。それは実際に紙に書かれた書誌を手にして、情報を探すという体験をしている学生が、学部生だけでなく院生についても非常に数が少ないために、書誌を作るとか書誌を編む困難さ、あるいはそれよりも大きな喜びというものがなかなか伝え難くなっていることにあります。

そういう時代にあつて天野敬太郎先生の遺業に沿うような書誌が誕生したことは、一種の奇跡を感じます。最後にこの書誌は多くの文献を集めたとか、網羅的な書誌であるということも重要ですが、それを超えて一つの人物文献書誌としてあるべき道を示したことにについて、私は個人的にも高く評価したいと思います。

三人目に奥出麻里さん。現在は千葉メディアセンターの図書室に勤務されていますが、その受賞理由について、読み上げさせてもらいます。

病院図書室研究会（現日本病院ライブラリー協会）副会長、日本医学図書館協会評議員、同病院部会幹事などの役職をこなすとともに、保健・医療系図書館員「みんなでつくる」デスクトップ LITERIS (<http://literis.unin.jp/>) の編集長から、好著として名高く版を重ねる『図解 PubMed の使い方 インターネットで医学

文献を探す』（日本医学図書館協会、2001・2006・2010）の共著、さらにヘルスサイエンス情報専門員（上級）を取得するなど、ワンパーソン・ライブラリーの病院図書館を切り盛りする中で展開されてきた、その旺盛な組織、執筆、講演等の活動と姿勢は、後進への力強い励ましとなっていることを高く評価し表彰するものである。

近年病院図書室というものが非常に注目を浴びてきていることは、皆さんもよくご存知だと思いますが、いわゆる医学図書館と深い関係にありながらも、今日それから独立した領域というか、新たな専門図書館のベースを築いているように思えます。

私自身はここ数年専門図書館協議会の機関誌『専門図書館』の編集に携わっておりますが、その編集委員にも病院図書室の方がいらっしやいます。お話を聞くと、やはり病院図書室の多くは一人で切り盛りするワンパーソン・ライブラリーであり、ワンパーソン・ライブラリアンである。ワンパーソンであるがゆえに他の館であるとか、他の病院図書室とのネットワークを築くことに非常に熱心、あるいはそうすることの必要性が切実であるように見受けられます。おそらくはその素地を育てられたのが、奥出さんを始めとする病院図書室のバイオニアの方々

だったのではないかという風にお見受けいたします。奥出さんの幅広い活動が後進への力強い励みになってきたと感じられてなりません。

以上が今回壇上におられるお三方の表彰理由ですが、とくに私自身が感じるのは専門図書館の世界が最近若干元気が無いという印象がありますので、今回お並びのお三方、あるいは奥出さん達のように後進を引っ張るライブラリアン達がもっともっと表面に現れていくことが必要ではないかと感じますし、その一翼を図書館サポーターフォーラムが担えればと思っています。

それから冒頭お話ししましたけど、この図書館サポーターフォーラム賞というのは、図書館員だけを対象とするのではなくて、図書館を外からサポーターするようなお仕事をされている人も表彰する賞だと私自身は考えております。これまでの歴代の受賞者もそういった方々がおられたと思いますし、今回はたまたまお三方とも図書館の現場で図書館員をされてきた方ではあるのですが、今回の候補の8名のうち3名は図書館の外から図書館をサポーターしている方達でした。ですので今後も図書館サポーターフォーラム賞というのは、ライブラリー・サポーター・フォーラムの賞ですから、図書館員もそうですし、図書館を外からサポーターするようなお仕事をされている人を表彰していきたいと思っています。

で、広く図書館に関わる仕事をされている方
ぜひ皆様から推薦していただきたいと考えてい
ます。

簡単ではありますが、以上をもちまして受賞
者の講評とさせていただきますと思います。ど
うもありがとうございます。

3. 授賞のことば

稲葉洋子氏

(元神戸大学附属図書館勤務 帝塚山大学
非常勤講師)

ただ今ご紹介いただきました稲葉でございま
す。

本日は図書館サポートフォーラム賞に選定い
ただきまして、本当に有難うございます。

今回の受賞理由に、神戸大学附属図書館「震
災文庫」の構築及びこれまでの活動、そして特
に今後の継続発展への期待を含めて頂きました
ことは、非常に心強い応援をいただいたと喜ん
でおります。

1995年1月17日午前5時46分、淡路島を
震源としました都市直下型地震は、神戸を中心
に家屋の倒壊、そしてその後の火災により、多

くの犠牲者を出しました。神戸大学も39名の学
生、2名の教職員を失いました。当時、7館室
で構成していましたが、6つの館室の復旧は
図書館職員の手で、一番被害の大きかった館は
交通網が復旧しはじめた2月に全国の国立大学
図書館職員ボランティアの手により後片付けを
していただきました。

屋根に青いシートがかけられ、あるいは更地
が少しずつ目立ち始めた4月半ば、学外の方
から「今回の震災についての資料を見れるところ
はないだろうか」という問い合わせを頂きまし
た。それがきっかけとなり、図書館上層部で阪
神・淡路大震災の資料を集めようという決断が
され、上司から私に通常の業務をやりながら「や
れるかどうか」意向を聞かれました。私は、「お
もしろそうだな」と思い、簡単に「やりまし
ょう」と引き受けました。後になって、そでこ
のやりとりを聞いていた同僚から「えらいこと
引き受けるなあと思ったよ」と聞きました。図
書館では、「被災地にある国立大学の図書館の
責務として資料を収集・整理・一般公開し、復
旧・復興計画や防災研究・教育に提供する」こ
とを決定しました。

まず、資料の収集です。まだ、インターネッ
トでデータベースを調べる時代ではありません
でしたので、東販や日販といった取次に依頼し
てデータベースを調べてもらいましたが新聞社

が出した写真集位しか出ておりませんでした。
並行して、学内や図書館内に目を向けました。
そうしますと、震災直後、水とかお風呂の情報
がFAXで大学にも届いていました。また、ボ
ランティア元年と言われたように多くのボラン
ティア団体がニュースや広報のチラシを作成し
ていました。そうだ、図書や雑誌だけでは何も
今回の震災は分からないのではないかと。チラシ
やFAX、町内会の掲示板に貼られた掲示物、
そういったものも収集しなければ、図書だけで
は復旧・復興の過程は捉えられないのではない
かと思いました。そこで新聞記事を1月17日ま
で遡って政府、市町村などの記者発表や学会な
どの動向、市民の方の動きを調べ、寄贈依頼を
開始しました。そして次は、県庁・市役所・商
工会議所・NGOなどを訪問し、神戸大学附属
図書館の震災資料収集の協力依頼をして回りま
した。

それでも資料は集まりません。6月初旬、地
元の新聞に神戸大学が震災資料を収集している
という記事を書いて欲しいと依頼したら、
記事を書いたら載せてあげるよと言われ、さっ
そく掲載してもらいました。この時、新聞社は
震災資料についてまだ興味がなかったようでした。

6月末、ようやく3000点の資料が集まりました。
寄贈依頼を出しても、大学図書館がチラシ
やニュースレター、レジュメまで震災資料とし

て集めるということがなかなか理解していただけません。この震災資料のイメージをつかんでいただく、そして震災文庫の広報もする、その両方を兼ねる方法はなんだろうと考え、その当時、まだ国立大学もほとんど公開していなかったホームページを立ち上げ、簡単なデータベースを構築して、ネットで公開することにしました。

7月初旬、同僚の協力で作ったホームページに「収書速報」と名付けて300点のデータを公開しました。それからは2週間に1度データを更新しました。

8月には1000点になりました。そこで分類、整理方法、そして一般公開日を決定し、公開に向けて目録担当係と協議しながら作業を開始しました。10月30日、整理が終わった資料約1000件をやっと場所を確保して一般公開開始です。一般公開に合わせて、HPも模様替えをし、検索もできるようにしました。当時、国立大学図書館の一般公開は珍しいことでした。しかし、「震災文庫」の資料はほとんどを一般の方から寄贈していただいております。一般公開するのが当たり前という認識でした。

公開を開始してからも、いかに使っていたかのようにすればいいのかいろいろと考えました。震災の翌年1996年7月、神戸大学附属図書館の被災写真300枚をキャプションを

付けてHPで公開しました。写真の画像は世界中から共有していただける情報ですし、図書館の被災写真は防災計画等に役立てていただけるのではないかと考えました。

翌年1997年夏、チラシやポスターなどの一枚もの資料が増えていくにつれ、書誌データから思い浮かべるイメージに利用者の方は大きなギャップがあるのではないだろうかと考え始めました。一枚ものの資料は表あるいは表裏に書かれた文言からデータを作成しますが、例えばポスターを思い浮かべますと、特徴として短い言葉で見た方にアピールするような文言が並んでいます。検索した利用者は、その文言からとても大きなイメージ、情報が詰まった資料を思い浮かべます。そして、坂道を上ってようやく神戸大学「震災文庫」に来て資料を見ますと、たった1枚のチラシということもありうるのではないだろうか。検索した結果、書誌データをクリックすると画像で見られたらもっと便利になるのではないだろうか、もっと利用しやすくなるのではないだろうかと考えました。

しかし、ネットで公開するには著作権の許諾をとる必要があります。そこで1998年から著作権処理を始めました。そうしますと、思いがけないことが起こりました。こんなチラシが資料になるの、他にも資料があるよと別の資料もいただけるようになりました。

1999年7月、文部省から補正で予算措置を受けた電子図書館システムが動き出し、同時にそれまで職員手作りのデータベースで構築してきた「震災文庫」をメタデータに移行しました。

同時に1999年から5カ年計画で科学研究費研究成果公開促進費を獲得して一枚ものの資料だけでなく、写真、動画、音声、そして図書のデータ公開へと進めていきました。

今年2012年4月で収集開始から丸17年が経過しました。今も月に100件以上、年間1000件以上の資料が増加しています。今年中には5万点を超えると思います。一つのコレクションを継続していく、それは人も予算も必要ですが、何よりも熱意が必要です。「震災文庫」は週30時間の非常勤職員が担当しています。一人で資料の情報を収集し、寄贈依頼をし、データ入力や装備、そして利用者へのサービスもするととなると、どうしても資料収集に漏れが多くなります。昨年4月、20代の若手職員から資料収集の支援をしたいという提案ができました。はじめの3カ月は新採用の職員を誘って4人ほどで試しに情報を検索していきますと多くの資料を発見できました。7月からは正式なWGとして立ち上げて、資料情報を見つけると共に、次の世代に「震災文庫」の活動を継承しようとしております。

東日本大震災後、被災地の大学や公共の図書館では、震災資料の収集に取り組んでおられる、あるいはこれから取り組もうとされているところが多くあります。

神戸大学では被災地の図書館を支援するべく、阪神・淡路大震災資料を収集している図書館や機関と情報交換会や見学会の企画をたて、実施しております。

本日はこの表彰式の席に娘を同席させていた
だいております。

娘は8歳の時に阪神・淡路大震災にあいました。「震災文庫」の構築の最初の3年位は所掌している本来の業務と、「震災文庫」の構築を並行して行うため、残業続きでしたし、同じように震災資料を収集している図書館の人たちと情報交換会をしておりまして夜もよく出かけておりました。しかし、「震災文庫」の活動が新聞やTVで流れますと見てもらっておりましたので、小学校で配られたチラシなども震災の資料になる?と持ってきてくれました。ある時、小学校で担任の先生と面談がありました際に、担任から「稲葉さんが、この前、先生、おかあさんね、大学でこの前の震災の資料を集めて大切なお仕事をしているのよと自慢していましたよ」と言われました。昔も今も、女性が家

庭と仕事を両立させるのは、家族の理解も大きな要素だと思いますが、その時の先生のお話で本当に嬉しくて大きな力をもらったように感じたのを今も思い出します。その時の感謝の気持ちを伝えたいと、本日は来てもらいました。

震災資料に限らず、災害資料というのは使っていただく、利用していただかないとコレクションを構築している意味がありません。「震災文庫」では常に「次はどうすれば、より利用していただけるだろう」ということを考えてきたように思います。私はよく同僚に言われました。アイディアを出してくれたら実現に向けていくらでも手伝うよ、と。

「震災文庫」が現在まで原資料もデジタル化された資料もどちらも活用されながら、18年目に入ろうとしています。

東日本大震災以降、デジタルアーカイブ構築や「震災文庫」と同様に原資料を収集・公開しようといういくつかのグループと情報を交換しておりますが、その際にいつもお話することがあります。

「構築を開始するのは簡単です。いかに継続していくかが難しいのです」と。

金沢幾子氏

(元一橋大学附属図書館勤務)

このたび、過分な評価を頂き、図書館サポートフォーラム賞を授けて頂けますことを有り難く、光栄に存じます。

事務局のお手を煩わせて皆様にお配りしてあります『評論』の「福田徳三の人となり」にも書いたことですが、福田徳三博士は明治・大正・昭和の初期には世に知られた経済学者・社会政策学者、大正デモクラシーのリーダーのひとりでしたが、今日ではほとんど忘れられております。けれども福田博士の学問や教育にたずさわる者としての情熱、人々の幸福を願い、福祉や厚生を目指し、生存権など基本的人権を重んずる精神は、埋もれたままにしてよいものではないと存じます。

この書誌は、まだまだ未収録の文献もあり、ミスもありますので、忤怩たるものがあります。福田研究をめざす研究者をはじめ、福田徳三とは何者と関心を持たれる方々のお役にたつことができましたら、利用者と資料を結びつける役割を持つライブラリアンとして、うれしく存じます。

福田博士は、図書館ひいきの方でした。自分の著作は必ず図書館に寄贈しました。

目録や索引の重要性も認識し、それを広め

しました。内外の大学の概要などの冊子も図書館に収集するように提言したり、関東大震災に際してはメンガー・ギールケ文庫という世界に貴重なコレクションを守ることを率先して行いました。また、図書館は耐震・耐火の建物でなければならぬと提唱しました。

このように図書館大好きな福田博士にとって、ご自分についての書誌が、この図書館サポートフォーラム賞を受賞するという名誉なことを大いに喜んで下さるのではないかと、私はひそかに思っております。

また、私に福田徳三書誌の作成をお勧めしてくださった杉原四郎先生は、天野敬太郎先生に師事したこともありましたので、いつも図書館員に対して目をかけて下さいました。杉原先生は日本経済評論社から出版しました『日本の経済雑誌』ほかを対象に1989年第3回物集索引賞を受賞下さいました（この第3回物集索引賞では日外アソシエーツの高社長も授賞下さいました）が、その授賞式に奥様のほかに、わざわざ私を同伴して下さいました。いま、私がこの図書館サポートフォーラム賞をいただけることを杉原先生がお知りになりましたら、杉原先生のことですから、ご自分の時のように喜んで下さったと存じます。

このほか、この書誌の作成にあたっては、いろいろ、多くの方のお世話になりました。

福田博士はドイツ留学から帰国後は教会に通うことはありませんでしたが、生涯聖書は欠かさず読んでおりました。その聖書の中のピリピ書に、「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起こさせ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである。」という箇所があります。皆さまへの感謝とともに、目には見えませんが、私をこのように導いて下さいました大いなる存在に言い尽くしません感謝をささげます。

奥出麻里氏

（千葉メディカルセンター（前川鉄千葉病院）図書室）

千葉メディカルセンター図書室の奥出麻里と申します。

今回、この図書館サポートフォーラム賞という歴史ある名誉ある賞を受賞することができ、ほんとうにうれしく思います。ありがとうございます。

私の働いている病院の名称は、正式には「医療法人社団誠馨会（せいけいかい）千葉メディカルセンター」と申します。昨年10月に諸事情で親機関が変わり、病院の名称が変更になった

のですが、それ以前は、「JFE健康保険組合川鉄千葉病院」でした。私が大学を卒業して就職した頃は、「川崎製鉄健康保険組合千葉病院」という名称でした。

このように病院自体の名前は変わってしまいましたが、私自身はずっと同じ病院の図書室で働いています。

大学では、ここにもいらつしやる今まど子先生の司書課程を修了し、先生のご紹介で就職しました。当時、病院に図書室がある、というところはほんとうに少なく、私が図書室を作るところで入りましたが、実際、何もありませんでした。英語の辞書さえありませんでした。

数十誌の雑誌を購読していましたが、それも欠号だらけ、バラバラで散逸、単行書も蔵書印を押したらもうどこかへ行ってしまふ、誰かが持っていくってしまう状態でした。

そんなところで、いったいどのように仕事をしていたらいいのか、まったくわからない状態ではありましたが、今先生のお宅に伺い丸1日教えていただいたこと、あとは、今のようにより便利なインターネットはもちろんありませんでしたので、電話一本が頼りでした。近隣の数少ない病院図書室、大学図書館の方々にたいへんたいへんお世話になりました。当時、病院図書室研究会（現…日本病院ライブラリー協会）が発足していたのですが、その研究会の仲間にも

たいへんお世話になりました。

仕事を始めて日も浅い日、相互貸借で文献の取り寄せを依頼されました。文献の所在も相互貸借の方法も何もわからず、ともかく、近隣の病院図書室に電話をかけ、すべて1から教わりました。調べるためのツールもありませんでした。いろいろ尋ねてくる利用者である医師に「わかりません」とはけっして言えず（言わず）、ただ「調べておきます」と言って毎日電話をかけていたことを思い出します。

今先生にはその後、大学院でもお世話になりました。

あれから長い年月、周りの図書館仲間の方々、そして院内のスタッフ、スタッフフィコール利用者の方々のおかげで、ここまで仕事を続けることができました。ほんとうに感謝しています。そして今回、このような賞をいただき、なんで私が？とほんとうにビックリいたしました。

ここにいらつしやる末吉哲郎さんが、たまたま当院の患者さんだったのです。図書室の利用者にもなつてくださったのですが、今回、推薦してくださいました。

きょうは、事務局の岩本さん、森本さんが、資料を作成してください、ありがとうございました。この最初にある略歴は『情報管理』という雑誌に掲載された書評記事のものなので、

私の方でも配付資料を用意させていただきました。よろしかったらご覧ください。

この本！ おすすめします 真実に迫る！
『ビック・ファーマー製薬会社の真実』『ねじれ—医療の光と影を越えて』『医学探偵ジョン・スノウ—コレラとブロード・ストリートの井戸の謎』『情報管理』2011.5(48):510-513
http://www.jstage.jst.go.jp/article/johokanri/54/8/510/_pdf-char/ja/

（★リンクしていただけると嬉しいです。奥出）

それから、病院の図書室については、なかなか知られていないと思いますので、手作りの「図書室利用案内」をお持ちしました。また、こちらは図書室概要、そして図書室の写真です。

こちらは私も関わって、日本医学図書館協会から出版させていただいている本、『図解PubMedの使い方』が3月末にちょうど第5版が出版されましたので、宣伝用のチラシです。

PubMed（パブメド）というのは、医学文献のデータベースです。見本を1冊お持ちしました。医歯薬・看護学など、ライフサイエンス系に関わる方々にぜひ、宣伝していただけたらと思います。

それから、私の図書室も所属している日本医

学図書館協会は80周年を迎えましたので、その記念誌『日本医学図書館協会80年記念誌』をお持ちしました。ご興味のある方はご覧いただけたらと思います。この中にも会員図書館の紹介として、短い文章を書かせていただきました。本日は、ほんとうにありがとうございます。これを機会にまた気持ちを新たに、これからも図書館の発展のため、力を尽くしていきたいと思っています。今後とも、どうぞご指導よろしく願います。

俳句八句

山内 明子

相性よき酒と露味噌私とも

皿下げるな防風残しをきたれば

花筵君とたたむや近づきつつ

君と入る梅雨の傘なり我は閉ぢ

布巾みな漂白をして梅雨迎ふ

玉子かけご飯定食新茶付

串焼きの細魚の皮や螺旋に巻き

夕さればあぢさると我しやきつとす



襷をかけないまゝで、走力の話しをしよう

―愛される応援者の心得講座、赤熱ゼミナール―

恵光院 白

某年一月二日、年末にやり残した大掃除Ⅱ節句働きを続けながら、ラジオで駅伝放送を聴いていた。昼過ぎの第五区、箱根の山登りで某大学ランナーは、走調「？」へロへロでついに途中棄権になってしまふ。往路ゴール目前であつた。この事について刻筆者は、開設されていたブログに「愛情込めて、叱正のコメントを書き込んだ」。

そう言えば以前わが母校がシード落ちした年の晩秋に、立川は昭和公園、予選会の応援に行ったことがある。大勢の選手たちのレースは既に始まっている一方で、応援団はまだ応援歌＋チアガールたちの元気な声が続いていた。一区切りパフォーマンスが収まった時、小生、寒風について、

「来年はこんな所へ、応援なんかに来るんじゃないぞ!」

と一発怒鳴った。一瞬その場は白くなった

が、OBの本音の激励に意味が分かった即後に、応援の真の目的を、気を引き締めての応援を自覚したのか、団員たちは安堵した表情にもどつた。小生とて他人には言えぬ、何やらお忍びでの立川詣だった。

このすぐ後コースへ移動し、声援、特に疲れて追い抜かれた選手に激励し、手をたたき続けた。もともと箱根駅伝は、関東大学陸連が開催するものなので、この予選会も関東地方と山梨にキャンパスを開いている大学、しかもその一大学で20kmを約一時間で完走出来ると自負する十人「以上」の学生のエントリーが必須となる。このエントリーの最低ラインですら殆ど無理難題に近い。ここでの試走は襷リレーの駅伝ではなく、全参加者は号砲での一斉スタート、直後から超バトル走、どんな選手も雑＋乱走のみ、コースを何周か走破して行く。失礼ながら聞いた事もない幾つもの大学も出場していた。その約三ヶ月前の夏、地獄の合宿、叱咤と

怒号を受けてか受けずか?して特訓を潜り抜けてのエントリーである。この予選会をルンルンで駆け上がったゆく大学チームがある一方で、決してパス出来ない多数の選手たちが、息も絶え絶えに走っているのも又現実である。実際には「箱根の夢」は最早幻と消えていて、無意味な走りとなっているのだが、それでもなお走り止めない。来年の為であり、後輩の為、自らの為である。OBでなくても、関係者ならずとも、大声で応援せずにはいられようか。

更に遡って筆者の高校時代の或る正月、箱根駅伝の第二区で順天堂大学・沢木啓祐選手がたき出した新記録(という記憶なのだが、沢木選手の活躍はやや後年なので、記憶違いの別人だろうか)に刺激されて、休み明けの初練習、長距離仲間数人で、短中距離のメンバーにその新記録の計時通りのスピードで2、3分走ってもらい、数人が併走してみたことがある。しかしその試走では全く歯が立たず、100mくらいしかついて行けない走力であつた。それを約一時間以上も疾走など出来るわけがない。短・中距離メンバーのユニフォーム姿がたゞ遠ざかっていただけであり、殆ど後ろに走っていると錯覚したほど、あまりの遅さで惨めなボロ負けであつた。そのあけく陸上部・長距離メンバー全員凹んでしまい、以後数回練習をズル休

みした。仮にも東京都大会に出場した（予選落ちながら）事もあり、学外駅伝の経験もある、我が高校では生え抜きの精鋭「？」だった面々がある。しかもこの正月の新記録でさえ、二〇一二年正月現在では既に埃をかぶった、最下位以下の記録に消え去っている。

さて今年二〇一二年一月三日の昼頃、JR田町駅西口から南へ約250m品川方向の三叉路、〈□□羊羹〉店前の歩道縁に座り込むと友人来着、年頭の挨拶のあと早や応援談議。主催新聞社の小旗を貰う。程なくリアル本番、箱根大学駅伝・復路第十区トップ某大がぶつちぎりで激走して来た、応援の気合いは半ば、焦る気持ちの10分間が過ぎ、二位大、三位大、漸く直ぐ後に我が母校チームのアンカーが続く。快走とは言えず大声で叱咤！。あつという間に走り去る。後に各チームが団子状態に続き、約30分で最後の某大（計時では最下位に非ず）が走り過ぎて競技は終了した。走路で実際に見る事とテレビ映像とでは、見るという行為でも、全く違う。選手のリアルな力走をみると、まるで現実の方が逆に虚像かと錯覚させられる。これまでのテレビ画像で頭と目の記憶、既視感が、マインドコントロールならぬ、アイ+記憶コントロールされてしまい、その上「山の神」伝説に汚染されているからだろうか。

いわずもがなの事で恐縮だが、この箱根駅伝の走者の心身のレベルは「頑張れ」と言われたから頑張れ、「やめちやえ」と罵倒されると走り止める等というレベルを遙かに超えている。例えば座禅の修行僧が黙したまま行を続ける如く、誉められてもケナされても無言で走り続ける。喜びも哀しみも走りの中でしか意味はない。また全区間・全ランナーには携帯はなく、半ば情報途絶の中を走る。監督車からの口頭での速報、或いは沿道各地点で仲間が紙に大書する掲示、残りは目算しかなく、全体や個々の距離感、点と線は、走者の腕時計と頭の中での暗算のみに限られる。

関係者として沿道に出るのは、出場選手は200人、以下未確認の人数ながら、補欠各チーム10人で200人、サポート・主務（＝マネージャー）他、チームで約100人＋支援OB100人、TV車、警察、医療チーム、報道・写真、主催新聞の各販売店の観客の準備ボランティア、応援団多数、又これ以外に前年秋の予選会落ちの大学チームを含め、沿道ファン無数、単純に何万もの人々が、沿道で悲喜こもごもの二日間を過ごす。

また忘れてならないのは、競技の主たる進み具合とは別に、その最後尾に主催者側の「競技終了のお知らせ」と「応援への感謝」の広報

車、警察のバトカー^{シンガリ}が殿を勤めていると当然想像できよう。更に近年は、終了後「翌日？」に、参戦した大学だけではなくボランティア諸君が、ビンカンや塵類を全走路の沿道を、回収して歩く活動も行っているという。また一走者をTVが映すのは先頭グループ分をならして単純平均で何分位となるのだろうか。また一大学チームは二日間合計で何分だろうか。以上、横道、閑話休題ながら。

冒頭のブログへの書き込みを、記してみたい。

……一月二日昼、元箱根での途中棄権、何たる醜態。自軍チーム全員の昨夏、地獄の合宿を無きモノにし、年末までの苦闘の集中をホカしたのである。先の十一月、立川昭和公園予選会で涙を呑んだ大学チームに申し訳が立つはずがない。遡って何年か前、滑り出しの第一区後半、某大選手が全く走りを止めてしまい、夢遊病者さながらフラフラ歩きで第二区に襷を辛うじて手渡したレースがあった。これも決して誉められたものではないが、とにかく襷は繋いだのだ。棄権よりは何が何でもよい。順天大の沢木選手（彼の快走をラジオにしがみついて聞いた経験有り。後に同大監督、さらに陸連役員）を英雄と崇めた我が世代は、断じて看過し難い。今日の元箱根ゴール手前の愚走は、八十年以上の歴史に泥を塗り、走破したOB達のご恩

をドブに捨てた。天下の公道を、理と情と実を知る社会からの大きいなる声援のもと、走ってきた、走ってゆける、走らねばならないと言う価値の真意、いわば積善、を塵芥^{チリアクダ}として捨てたのである。その上、駅伝という日本発祥の誇るべきスポーツ興隆運動、人類遺産的な文化を世界に広めていった多くの人々、それらの崇高な歴史への貢献を貶めた。その罪は半ば万死に値する。今後決して同大卒も箱根も語ってはならない。自主退学し再度入学試験を受け直せと言いたい。少なくとも次年度はその大学チームは一回欠場し全員謹慎すべきと提案する。何故ならば、

「体調不良、又は完璧な調整ではない事を、監督＋コーチ陣に、自発的にアピールする」

事に何の躊躇や遠慮が要るものか。それこそが現代競技に参加しようとするスポーツ人の義務、フェアプレーの真髄である。体調管理を全う出来なかった選手の道義として、自律的・自覚的に事前に手を挙げねばならない事である。

ここでの体調管理は自らであつても、自らだけではない故にある。走ってみなければ分らない、などというレベルを越えている。先の精神に導かれて走破し切ってこそその試合であり競技なのだ。合宿所に参上し、後輩選手達を前に「後略」……

このブログへの書き込み後の夜半、投稿拙文

に対し、誰か某若輩が「お前が走ってみろ!」、
「許さない!」等の反応があつた。

この様な言葉は一瞬、判官鼻眞に聞こえるものの、単なるファンのその場限りの慨嘆語、溜息の類に過ぎない。当然「走ってみろ」と言う言葉は、例えば医療過誤裁判などの場合、「お前が手術してみろ!」と言ったとしても、実際には誰も医者になれず、手術は出来ない。これは山岳救助隊の失敗時の際の争論でも言えよう、「現場で救助してみろ!」等と。外野の単なるファンが別のファンを罵倒しても何の意味もなかるう。「許さない」の語も同様で、仮に「許される」と、そのレースが再び好転する訳ではない。それ故、場外乱闘用／非当事者用の無意味で唯ぶつけるだけの言葉、言うに事欠いての、その場限りの唾み合いに過ぎず、内実を弁えない志操未熟な愚者の言である。

このような事態・状況が救われず、事が極まつた時、叱正からもしかろ学ぶべきで、叱正してくれる人こそ世の真のお味方なのであつて、断じて憎つき敵ではない。つまり多くの物事は常に、暖かい言葉や美しい場面だけでは収まらない事を、深く悟るべきなのだと見えようか。

この某大学チームはその年の秋に、当然予選会からの出場となつたが、明けての正月のレース本番で再びシード落ちとなつた。その年の九月、千駄ヶ谷の国立競技場での大学陸上選手

権観戦時、偶然筆者の隣の席になつた同大OBに、話しかけた折に気の抜けた返事、

「特に誰にも、お咎めはナシですヨ。」

というなぜやりの言葉の果て、その晩秋の昭和公園の予選会も落ちた。翌々年の正月、名門たる同大陸上部ホームページ上には、[〃]駅[〃]の字、[〃]伝[〃]の字は、影も形も無く、惨めな画面であつた。

「万全を期さないスポーツ集団よ、朽ち果ててあれ!」、である。

別のある年の正月のレース後、新聞の各種データで駅伝の走差を一度計算し直してみた事がある。優勝大チームは、

217・9 kmを完走して、10時間59分51秒であつた。

10 x 3600 + 59 x 60 + 51 =

39,591秒、

217,900 m ÷ 39,591 [秒] = 5.50 m

(四捨五入)。

同様に最下位大チームは、

217・9 kmを完走して、11時間28分00秒であつた。

た。

11 x 3600 + 28 x 60 + 00 = 41,280

秒、

217,900 m ÷ 41,280 [秒] = 5.28 m (四

捨五入)、

である。つまりレース全時間内で、優勝大の

チームは巡行走力・毎秒5・50mで走り続け、二十位のチームは同様に走力毎秒5・28mしか進んではいけない。つまりトップチームは最下位チームを毎秒／毎秒22cm、常に置いてきぼりしてゆく、という過酷な競技である事が分かる。

同じ年の元旦の朝、実業団駅伝でのトップチームの平均速度は、毎秒5・80m。箱根大学駅伝が実業団駅伝に較べて遅いのは、前者が箱根の山登り（区間比較では一番距離が長く、かつ急カーブ＋寒い）＋山下りと急カーブであり、後者は平地走行である。総距離では約二倍（約200km超vs約100km）、各区間の距離が長い（約20km平均vs約14km平均）、かつ選手数が多い（十区間vs七区間）、後者では元氣な選手を揃えられる等。また実業団走者は、成年男子として身体の完成期にあるから等だと考えられる。参考ながら、通常のマラソン（42・195km）の好成績、2時間06分とすると、毎秒5・63mである。閑話休題。

再びその箱根駅伝の話しに戻る。つまり先の毎秒22cmの中に全二十チームが「全速力という前提で」雑走しているというのが現実である。各チームの全体の走力や走法はその年度と前後しつつ変質、乗り越えられてゆくもので、しかも年々そこで展開され凝縮される勝利への意思

と完走・完遂には、現実的な適応が求められ、それに何が何でも対処せねばならない。出場する選手たちのキャラクターにも世代間ギャップがあり、年々変化する。つまり平成期に生まれた生身の人間の強さも弱さも、ふて腐れも、プチ喜びも、増長も萎縮も内包する。例えばながら、先頭集団チーム、中位チーム、後方チームでは競技哲学が天地ほどに全く違って当然である。下位チームは、勝手に後ろに向って、つまり敗走に向かって走っているとしても諭えられようか、見た目には前に向かって走っているようにも、またその意思が全く無くとも。

参考ながら、無関心の人ならば、走る事自体に最早意味はなく、競技ですらないと、とらえるだろう。それ故、復路の各中継点では、トップ通過時から何分過ぎたら繰り上げスタート＋白襷の着装（大学固有の色襷の連係は途切れ、計時のみ加算）等というルールは、至極当然であり、以後は試合を切り上げてよい程である。交通の混雑、道路事情への配慮だけではない。無論走者のみの咎めではなく、大学の支援体勢、監督、コーチ陣以下チーム全体の責任ではある。それ故来年に向かっては、多重債務ならぬ過酷な課題が、おんぶお化けの様にのしかかる事となろうか。

さて、そこでの計時から、トップが優勝ゴー

ルしたその瞬間に、最下位のチームは28分09秒遅れているのであるから、

28分09秒＝1,689秒、

5・28m×1,689「秒」＝8,917・92m

≒8,918m。

これを大手町の読売新聞社旧社屋前のゴールから逆測すると、遠く南のJR品川駅北方、泉岳寺前あたり、あまりの遅さ、絶望の地点であり、地獄の走路である。それ故、テレビには大手町のゴールに飛び込んだチームの騒ぎだけを約30分間映し続け、最下位のチームは無視され、ゴールの瞬間以外放送されず、解説は皆無であり、翌日の一般新聞には写真も名前も出ない。応援してもどうにもならない距離、地点である。

しかもその最下位の選手が28分余（いや鶴見の中継点から1時間以上も）たゞたゞ一人走る事でしか、公的な競技は完結しない。本人の気持ちに何やら関係し、かつ関係しないまま、警視庁白バイ2台、監督車、審判車、TV車、報道＋ラジオ車、総括＋主務（マネージャー）本部、医療班車を引き連れて「の様に」走っている。因みにその年の最後尾チームの第十区走者の記録は後日調べてみると、二〇位、最下位であった。涙の応援と蔑みの視線「？」は彼一人に注がれる。

だが、多くの人々の事や結果を知ったとして

も、翌日のスポーツ紙、各紙観戦記には英雄を讃える文章に埋めつくされて終わっている。報道関係者で実際に走った人は何人くらい居るのだろうか。

この第十区、言わぬが花ながら、実に無慈悲な仕儀、場面である。「涙は一人になってからだ、顔を上げろ、ひたすらに走れ、貴君の完走こそスポーツの崇高さと走りの神様への心の祈りだ!」、或いはまた「そう、この十区は夢の舞台、僅か20人しか走れない、この走路こそ貴君のレッドカーペットなのだ、自ら輝かなくてどうする、貴君の渾身の走りこそが光輝なのだ!」、と、無言で励ます言葉の他に、かける言葉はない。仮に四年生でなければ「来年も必ずこの道に、仲間と一緒に走りに来いよ!」などの声援となろうか。

栄光を目指してもなお苦悩と窮走を余儀なくされ、完走の責任感・達成感を半ばとして、悔しさと暗澹の淵に深く沈んで終わるという、これ等のない交ぜになって語られる言葉・文章は、殆どない。練習日誌に書き込めた誓いの言葉、襷に綴られた全部員の名前や、縫い込まれた箱根神社のお護符もさることながら、深夜早朝時の実走路での事前の私的な検分と確認「試走?」、雪・雨・寒風・気温への対策、チームへの貢献と走友への感謝、ルールの熟知と遵守・適応、競技の大儀への堅い意志、意欲の内

的な走破への昇華、全員のベスト体調への集中等々、万全を尽くして後に与えられた一瞬間の時間を全うした、走神の堂々たる使徒たちへの、栄光と讃美とを願って、プチ・ゼミナールを終えたいと思う。

(一読多謝)

戴冠式に参列して ウェストミンスター寺院にて

— 痛々しい王冠 救い給えと神に祈る — 今 日出海

今 まど子

エリザベス女王の戴冠式に、ウェストミンスター寺院の玉座周辺の席を与えられたことを光栄に思いつつも、周囲の異様な人々の姿、式場の荘厳で緊張した雰囲気、私は落着かぬ思いをした。白いテンの肩あて、クリムソン・ローブの裳を長くひいたのは貴族であろう。また灰色のかつらをかぶり、赤いガウンをまとったのは法官であろうか。これらの間にダイヤモンドの髪かざりをつけ、肌をあらわのローブ・デコルテの婦人たちが居並ぶ。私は天然色映画の時代劇めいた人物達の間にあつて時代錯誤的な自分に苦笑した。

定刻三時間前に寺院内の座席はいっぱいになった。『荘厳ミサ』のような音楽が始まり、場内に合唱隊の音が嵐のようにふきまわった。口ボの先駆が到着したらしい。鐘楼の鐘が曇った空に鳴り渡る。外の歓呼の音がすかに聞える。突然、場内に緊迫感がみなぎったが、私の席からは中央玉座しか見えぬ。いまは数千の

人々の目が中央の赤い椅子を見つめるばかりである。ここに座る女王を待っているのである。ぞくぞく皇族クイーン・マザー、マーガレット姫が長い裳をひきずって現れ、グロスター公、ケント公、そして夫君エジンバラ公が所定の席に座った。最後にエリザベス女王が美しい六人の乙女たちに長い裳すそを持たせてしずしずと祭壇の前に玉歩を運んでこられた。

式はウェストミンスター寺院の大僧正と女王の問答にはじまる。大僧正の太く力強い声に女王のリンとした声が答える。およそ三時間の間、祈祷と合唱と管弦楽がゴシックの寺院内にこだまする。女王の頭に宝石と黄金の冠が載せられる。か細い頸でささえるには重そうである。黄金作りの剣とシャクと鳩頭の杖を持った女王の姿は、私にはいたいたしく見えた。多難な大英帝国の未来をこの若くやせぎすのエリザベス女王が背負うのかと思うと無縁の私まで、人々とともに、神よ女王を救い給え（ゴッド・

セーヴ・ザ・クイーン）と唱えざるを得なかった。

今年はイギリスのエリザベス女王のご即位60周年に当たる。今上天皇も60年前皇太子であられた時に、女王の戴冠式に参列してお出でになる写真が新聞に出ていた。お若い19歳の皇太子様のお写真を拝見していて、そういえば、父（今日出海）も戴冠式に参列していて、読売新聞（1953年6月3日3面）に記事が掲載されていたのを思い出した。1953年に父は評論家の小林秀雄さんとヨーロッパ旅行に出かけていたのだ。たまたまパリにいたので、読売新聞の方に戴冠式に参列して記事を書くよう依頼を受けた。タキシードや靴など借着に身を固め参列した。父はあまり背の高い方ではないし、足も大きくないのに、ちゃんと合うタキシードがあった。さすがイギリスだ。それに紐のついた靴ではなく袋みたいなさっぱりした靴を履くものだそうだ。式が終るとパーティもそこそこ新聞社のロンドン支局に駆けつけ上記の記事を書いたのだ、東京の締め切り時間に間に合った。新聞社では、間に合わない時のために予想記事を書いていたそうだが、それを無駄にした、と言うのが父の自慢だった。

先月、心臓手術のすぐ後にも関わらずイギリスまでお出ましになった天皇陛下が挨拶をして

おられる、でつぷりとそして悠々とされている
女王のお写真を父に見せたかった。
何と言うだろう。



失敗談

しやれ神戸（井上 如）

誰の句か知らないが、「世の中は、澄むと濁るの違いにて、刷毛に毛が有りハゲに毛が無し」という狂歌がある。自分ならさしずめ現代風に「世の中は、澄むと濁るの違いにて、キスは好き好き傷はズキズキ」とでも詠むところである。この腰折れの方が、澄むと濁るが二重になっただけリズム感を強調することができ、優れていると密かに自負している。

似て非なる一語違いに、「誤り」と「過ち」がある。アヤマチには、罪を犯すというか、どこか道徳的な臭みがあるが、アヤマリにはそれがない。だからこの二語の使い分けを誤らないようにしないと、失敗する。ついでながら、手元のポケット版の和英辞書を引くと、アヤマチは英語で fault（過失）、アヤマリは error となる。だけど、周知のように、テニスのサーブが相手コートの然るべきゾーンに入らなかった時は、fault と言って error とは言わない。それじゃ、テニスのサービス・フォルトは犯罪か、

サ、どうしてくれると居直って、手当たり次第に辞書に当たり出し、病膏肓（コウモウ読みは誤り）に入り、いたずらに月日を過し、ついに一生を棒に振る人が、図書館員上がりなどには特に多い。

さて、自分のやらかした不始末が、fault や error 程度なら、東日本大震災以降、世間で流行るものというか、一斉に並んで立ち上がって、ドウモ、スミマセンデシタと言って、チョコンと頭を下げればそれで済むが、failure（失敗）となるとそうはいかないということを、これまで、2度3度思い知らされたことがある。その最初は、若い頃、それなりに身を入れて熱心に読んだ Harold L. Wilensky の名著 Organizational Intelligence だ、その中で Intelligence failure という語に出くわした時であった。今、その詳細に立ち入ることはしないが、コトが、情報なら、misinform、つまり fault や error 程度の日常語と見て大過ないが、

intelligence となると、その失敗は国の命運を左右することになりかねない。Wikipedia の記事は何百万あるのか知らないし、大部分はつまらないものだが、中に一つだけ面白いものがある。タイトルは The Ten Biggest American Intelligence Failures だ、それによると、米国が犯したインテリジェンスの10大失策は、
① Pearl Harbor Attack ② The Bay of Pigs Invasion ③ The Tet Offensive ④ The Yom Kippur War ⑤ The Iranian Revolution ⑥ The Soviet Invasion of Afghanistan ⑦ The Collapse of the Soviet Union ⑧ The Indian Nuclear Test ⑨ The 9/11 Attacks ⑩ The Iraq War となっている。日米開戦から半世紀以上経って、ハワイで遊んでいた時、ふと思いついて真珠湾を船で巡る会場ツアーに参加したことがある。その時、今も湾内に沈んでいる米国海軍の軍艦の、海面近くに突き出た部分を眺めながら、往時のラジオ放送、昭和16年12月8日午前7時、大本営発表、を思い出して万感胸に迫るを覚えたことであった。一方、項番⑨の9月11日のアタックは、最近ニューヨークにこそ無沙汰しているので、もう一つ実感が湧かない。とにかく、戦争であれ企業経営であれ、弥生時代以降、庶民の九割近くがタンボの中を這いずりまわって稲を育て、田吾作的植物人間の集団と化した日本人に諜報活動など出来るわけ

がない。これくらいはつきりした事実はない。

思い知らされた failure の二番目は、これもアメリカ英語のことだが、歩けなくなることを walking failure と呼ぶことだ。2003年にカリフォルニア大学バークレイ校から出版された『When Walking Fails, Mobility Problems of Adults with Chronic Conditions.』という書物がそれだ。日本語にすれば、「歩けなくなる時——成人の慢性疾患としての歩行困難」とでもいうのだろうか。1961年、留学先の寝コロンビア大学がマンハッタン島のセントラル・パークのそばだったので、到着するとすぐに公園に散歩に行った。公園のベンチには、呆けた年寄りがずらり並んで座っているよ、ということとはかねてから聞いていたので、確かめようとしたのだが、その通りだった。毎日、移動に車ばかり乗っていて、移動する必要がなくなったとたんに、座るだけの生活になるのだと言う。

もちろん、今は違う。今は公園のベンチの代わりを wheelchair が果たしている。何もそのことで異国に想いを馳せる必要は毫もない。現に、今自分が住んでいる神戸の老人ホームは車椅子だらけだ。

われわれの祖先は、アフリカ大陸の東側の森が、気候変動に伴ってサヴァンナになって、森の中から追い出されて、止む無く二本足で立つて歩くようになってから250万年歩き続けて

きた。アフリカから、ユーラシア大陸から、南北アフリカ、オセアニアの各地にも歩いて到達し、地球上にはびこった。

ヒトは歩いて人間になった。二本足で立って歩けるようになって、両手が空いたので、それで道具を作って文化を持つようになった。大脳は、二本足で歩くのにバランスを取る振り子の必要から頭蓋骨の中に味噌が溜まったのであって、なにももの考えるためではない。二本足で歩き始めると、咽喉が重力のために奥へ落ちて行き、そこへ出来た空間を共鳴に利用して声が出せるようになり、やがてコミュニケーションが始まった。哺乳類の雌の乳房は、四足動物を見れば分かるとおり、へそのあたりにあったのだが、ヒトは二足歩行をするので、女性の乳房が次第に、重力に逆らって上部へ移動して、母親は赤子の顔を見ながら授乳することが可能となり、そこから母性愛が生まれた。子育てに要する期間が長期化するにつれて、家族が誕生する一方、少子化が進んだ。脚と足は、長距離連続歩行、長時間連続歩行に耐えられるように、独特の進化を遂げた。土踏まず、縦のアーチ、横のアーチ、踵（着地）↓小指↓親指（蹴り出し）と重心を移動する「あおり」など、独特の歩き方はヒトだけが可能である。二本足で立って周囲を見渡すと顔と顔が合う。そこから、他の哺乳類とは比較にならぬほど強烈な、

ヒト独特の敵対性、攻撃性が芽生えた。かくして戦争は、これもまた二足歩行に起因するものであって、不滅である。

ヒトは歩いて人間になった。これを可能にしたのはただ一つ、直立二足歩行以外のなものでもない。しかしその二足歩行もついに終わりに近づいてきた。恐竜（二足歩行！）はなぜ滅んだか。恐竜やスズメバチを捕食対象にしている生き物はいない。なのに恐竜はなぜ滅んだか。それは、どこからだか知らないが、巨大な隕石が地球の引力圏内に突入して、メキシコのユカタン半島に激突し、地球上の生物の生態系をかつてないほどひどく破壊したからだと言われている。恐竜は、最近の幕の内力士みたいに obese で、ドジで、その破壊に基づく気候変動に適応できなかったため滅んだということが判明したのはつい最近のことだ。これこそは failure という語で表現するに値する事態であろう。

自分自身の、他に較べるものとして無い、巨大な、超弩級の failure について触れる紙数が無くなってしまった。が、まあ、またいつか搔く機会もあるろう。一つだけお断りしたいのは、一昨年暮れ、神戸に引越してから以降、むかし愛用していたペンネームの「しゃれ神戸」を resume したので、今回もそれを使わせてもらったことである。

近江さん天国へ旅立つ

末吉 哲郎

「図書館に行ってくるよ」「図書館力をつけよう」「図書館でこんなにちは」（近江哲史著日外アソシエーツ刊）などの著書で知られる近江哲史さんは二〇一一年一月二日に逝去され行年七八才でした。

近江さんは第八回（二〇〇六年）図書館サポートフォーラム賞を授賞されている。その表彰理由を当時の表彰委員長井上如氏はつぎのように述べている。「『図書館に行ってくるよ』『図書館力をつけよう』などの著作は①図書館に関する広範囲にわたる並々ならぬ勉強のあとをうかがわせる②その勉強で得た知識はよく咀嚼されていて、知識として結実している③親しみやすい文章でその知恵の伝授が図られ、読者に「よし自分も」という気にさせる力を持つ。想像力豊かな図書館の非専門家ならではの仕事である。」

近江さんは大日本印刷にご勤務の頃から主として自分の関係された印刷、社史、企業出版な

どについての著作を書かれているが、定年で会社を辞めてからは地元の公共図書館を熱心に利用すると共に読書会や自分史研究会を主宰している。そして地元の図書館の分館の指定管理者を手がけたりしながらその経験をもとに利用者からみた図書館のあり方について前記の図書を出版されたわけである。

小生とは主として仕事上の関係でお付合いをお願いしていたが、印象的だったのは小生の勤務する経団連図書館にやってこられて、会社史の作り方についての実務的な参考書はありませんかと相談を受けた。一九七〇年台のことで企業の周年事業として社史づくりが盛んになりかけた頃だった。学者先生の高邁な社史論はあったが、企業の実務者向けの参考書は皆無だった。

そこで近江さんに「どうですか、あなたがお客様の書きになってはいかがですか」と申し上げた。しかし近江さんは会社の社史制作担当部門に配属されて日が浅い頃で年令は四〇才台で経験も

浅い。笑って受け答えをしていたが、それから三ヶ月位して来館「書きましたよ」とどさっと原稿の束を置かれた。小生も忘れかけていたのでびっくりしたが、従来の社史論と異なり極めて実務的な切り口の原稿である。日をあらためて東洋経済新報社の知り合いの編集者のところに原稿を持参検討をお願いした。日ならずしてOKの返事がありその秋、一九七五年には出版の運びになったのである。あとで聞くと社内では異論もなく社長もいい出版企画とほめていたそうである。

近江さんは大変な勉強家で大学では哲学を専攻されていたが、実業界に就職してからは専門の枠を超えて、非専門家の立場で新しい観点の著作を数多く世に出されたのである。

冒頭の図書館論も利用者の立場からのもので利用の仕方を読書三昧、調べごとの達人など初級、中級、上級と区分し最後の有段者になると図書館経営に乗り出すというような思考である。そして自らもそれを実践し、後には指定管理者として図書館経営に参加するのである。

近江さんはガンを発病されて晩年入院生活を送られるのであるが、入院中の出来事や観察を日誌風にエッセイを書かれたものを「病中漫録」のタイトルで小冊子にまとめ関係者に配布された。亡くなる三ヶ月前のことである。

内容的には看護婦さんのマスク越しの美人度

の見分け方や、病巣の違いで手術は内科と外科に分れ旧陸軍と海軍的な競争があるとか、読者の立場を加味した漫録調である。

また三・一一の東日本大震災のあった時四階の病室から階段を一階まで降りケイタイを忘れたのでまた引返したとか。ガンの本を読みふけて医者が増えると患者が増えるなどの所説の紹介などもある。そして巻末には旅行に出たいとして家族と豪華船で世界一周の旅に出る話でしめくくっている。

故人の通夜・葬儀は流山の教会で行われた。司祭の牧師さんの話では亡くなる五日程前にキリスト教に入信された由であった。

仕事は地域活動で熱心に図書館を利用すると共に、豊かな表現力を發揮して著書の数々を出版されたがその多くは非専門家・利用者の立場からのものであり、小生は近江さんを「非専門家力の星」（チャイカ誌十六号二〇〇九年）と礼賛したことがある。

近江さん長い間ありがとうございました。



時雨^{しぐれ}して——小唄漫遊記

平井 紀子

に、清元風の粋な節付けをして早間に唄った。
お葉のこの唄は、のちに江戸小唄の第1号とみなされている（註1）。

元禄期前期の経済・文化の中心は関西にあり芸能も上方中心であった。その頃、三味線の演奏法もほぼ確立していて、商業都市の大阪では竹本義太夫の義太夫節が起り、近松門左衛門と組んで義理と人情ばなしの世話物が町人の涙を誘い賑わしていた。享保の頃になると、江戸にも物流を通して上方の芸能が移り、音曲もまたたく間に広まった。江戸の音曲は上方のゆったりした情緒に富む上品な上方唄とはちがひ、江戸町人の感性に合った軽快で平俗な短くまとまった唄がはやった。

当初の江戸唄は、はやりすたりのある短い唄で、まだ記譜法が不完全なために口伝えに町中で口ずさまれ、しかも短いので一曲一曲人により唄い方が違い、統一された音曲ではなかったらしい。唄い方、節廻しも様々で、田舎唄や労働唄もあった。こうした庶民の唄を、正統派である雅音や能・狂言に対し、総称して端唄と呼んだ。

小唄は江戸後期、この端唄から派生したものである。端唄は撥弾きで、華やかなものが多いが、小唄に爪弾きで、端唄に比べると、唄い方は繊細である。

お葉が父の下で習得した清元節とは、浄瑠璃

戸、明治、大正と時代軸に唄が紹介されている。また、地域・場所をテーマにするものであれば、浅草、向島、吉原と、江戸八百八丁それぞれの町内にちなんだ唄が紹介されている。江戸の橋をテーマにした唄も多い。祭りや喧嘩、火消しを主題別に分けた唄もあり、当時の逸話などが盛り込まれ読者を惹きこんでいく。唄によって作詞・作曲者が解説されているものもある。出典に『守貞漫稿』や『江戸商売図絵』など、その昔よく見た文献名が出てくると、興味が倍増し、本棚から江戸関係の読み物を引っ張り出して読みふけてしまい、かんじんの稽古がまた後廻しになってしまう。

きよもと

小唄の創始者は、清元お葉（天保十一〜明治

三四年 1840-1901）といわれている。二世清元延寿太夫の娘で、お葉十六才（安政二年）のとき、「散るは浮き 散らぬは沈むもみぢ葉のかげは高尾か山川の 水の流れに月の影」の詞

「時雨して」は、小唄の唄い出しの文句で、曲の題名にあたる。小唄には芝居小唄や特殊なものを除き、特に題名というものはない。小唄に関する本のなかで、ある唄を探すには、巻末索引を使うことが多い。それぞれの曲の唄い出しの文句が五十音順に配列されているから、初句のところをみれば目的の唄を探せるのだが、それが分からないと、探せない、探すのに手間がかかることになる。索引の多くは巻末にあるが、目次と兼ねて「初句索引目次」という索引と目次が一緒になっている本も多い。ただ、この場合は、唄い出しの文句の順であるから、「あ」から始まり「を」の順にページが進んでいく。古い本であれば、「いろは順」もある。参考図書で探すには便利であるが、読む本としてはあまり面白くない。それは唄の配列や前後の唄との間に何の脈絡もないことが多いからだ。曲目集や教則本のようなものを除き、小唄の読本は、歴史的に書かれたものであれば、江

の語りに重用され、その節廻しは、声ののぼし方、喉をふるわせて鼻を使う音声法を用い、かん高く、きめ細かい音色を発声する唄い方に特徴がある。

お葉は、この清元節を下地に、江戸町人好みの小粋で早間な唄に節付けした。曲は三味線を主体とした軽妙な唄い方が当時の江戸っ子の共鳴を呼んだそうだ。

小唄は、能・狂言、長唄などの正統伝統芸能ではなく、大衆芸能であり、一曲1・2分の早間の音曲である。江戸の小唄は、芸術性より娯楽性の強いユニークな芸能音楽であろう。また、一般的には長唄に対して短いので小唄と呼ばれるようになった。

明治二〇年代に入り世の中が落ち着き、町人層にもゆとりが出てくると、江戸情緒に満ちた文芸が好まれて愛好者が増え、政治家、財閥、文士、商人の富裕層が、待合いや花柳界のお座敷で、余興で即興的に詞をつくり、節付けして小唄がつくられた。明治後期的小唄には、尾崎紅葉、泉鏡花、平岡吟舟、伊東深水など各界の大御所が詞をつくっている。

大正期の小唄界は大正レトロの風潮下で裾野を広げ、家元を名乗り、いろいろな流派が誕生した。ほとんどが女性の家元で、花柳界出身者が少なくないというのも小唄の歴史を物語っている。

「時雨して」は、大槻如電が作詞・作曲した小唄である。如電よりも弟の大槻文彦の方が、図書館人には、なじみがあるかもしれない。国語学者で、国語辞典『言海』の編纂者として著名である。

大槻如電（弘化二〜昭和六年 1845-1931）も弟と同様に、明治後期から昭和初期に活躍した学者・著述家であるが、なかなか興味深い人物である。仙台藩士大槻磐溪の長男で、仙台藩の藩校養賢堂で国学を修め、文部省の『新撰字書』の編集などにも従事したが、三〇才で退官、三四才のときに家督を弟の文彦に譲り、自由な身になって著述業に専念する。和漢洋学から邦楽・俗曲・舞踊など伝統音楽にも通じ、作詞・作曲・振付けをするという万能選手であり、固い「学」の世界から洒落の世界までを闊歩し、博学奇行でも知られていた。

小唄「時雨して」をとりあげたのは、私の所属する小唄の浴衣会で、大槻如電作詞・作曲のこの唄を唄うことになったからだ。

時雨しぐれして待つ身みは辛つらき 葛つたもみぢ

訪おものうものは 軒のきの雨あめ

しめりがちな床とこの花はな

詞に解釈・解説をつけるのは、ヤボであるが、

詞の意味やその心を理解して唄うのが小唄の真髓ともいわれ、モノの本では、声が良から上手というものでもないらしい。この言葉に目をつけ、邦楽の発声に苦勞している私だが、年の功でせめて想いを込めて唄いたい。

「唄の心は、紅葉した草木に時雨が降り注ぐ風景に、やるせない女心を詠んだもの。晩秋から冬にかけて時雨が降るころ、訪れぬ男を待つ妓の侘びしい気持ち唄ったもので、「床の花」は置物に活けた花のことで、妓の気持ちの切なさや床の花によせ、手活けの花となった嬉しさも束の間、床の番ばかりさせられている。淋しく侘びしく謳いこんだ唄である註2」とある。

夏に唄うには季節がずれているが、メロディーが気に入ったので決めた。詞のなかで少し気になったところは、「葛」「紅葉」とあるから、春には青々とした葛の葉が蔓を延ばし、秋になると「もみぢ」が紅葉することだと、「葛」と「もみぢ」を別のものと解釈していた。手本となる春日派の師匠のテープを聞いても、葛と紅葉は別もののように唄われている。

だが、辞典で「葛」を引いてみると、「ブドウ科の落葉蔓性木本。茎は吸盤を有する巻ひげで堀・壁など他物にからむ・・・初夏は緑色が鮮やかで、秋には紅葉が美しい」とある。紅葉は、「もみぢ」という固有の草木ではなく、秋になると葛の葉が紅く色づく（こうようする）

ことで、四季に美しく変身する植物や自然界の流れを謳っているのであろう。葛と紅葉が同一であれば、唄い方も当然違ってくるのではないか。

だが、こんな屁理屈を並べたところで、曲想豊かに唄うことができるわけでもないのだが、調べてみたくなるのが習性である。

註1…木村菊太郎『江戸小唄』演劇出版社

一九六四

註2…平山蘆紅『小唄解説』住吉書店

一九五三

参考文献…平山 健『小唄江戸散歩』立風書

房一九八八



Samuel Johnson, 1709.9.18 – 1784.12.13

Knowledge is of two kinds; we know a subject ourselves, or we know where we can find information upon it.

James Boswell. *The Life of Samuel Johnson*. 18 Apr., 1775.

「知識には二種類ある。われわれが自身その問題を知つてゐる場合と、それについての知識が何處を探したら得られるかを知つてゐる場合とです。」

神吉三郎訳『サミュエル・ジョンソン伝』岩波文庫 中巻 p.126 1946
1988 復刻

「知識には二種類あって、我々は或る主題を自分で知るか、それともこの主題についての情報がどこでえられるかを知るかです。」

中野好之訳『サミュエル・ジョンソン伝』第2巻 p.139 みすず書房 1982

「知識には二種類ある。自分で何かを知っているか、知りたいものについて何を調べたらいいかを知っている。」

藤川正信訳 1963

新潮社ポケット・ライブラリとして一九六三年に出版されています。梅棹忠夫の『知的生産の技術』が一九六九年の岩波新書ですから、一足早い（早すぎた）知識論であり、情報論だったようです。この本の標題紙裏に刷られていたのが、ボズウェルが書きとめたジョンソン博士の言葉です。

語る相手のジョシユア・レノルズ (Sir Joshua Reynolds, 1723 - 1792) は、英国の肖像画家でロイヤル・アカデミーの初代会長でもあった人物ですが、ここに込められた、orに続くメッセージこそ、書誌や目録の機能であり、図書館員や図書館そのものの働きの本質があるように感じてきました。そして、学生には情報や資料には次性があることを説明して、ジョンソン博士や藤川先生が繰り返し語った（と記憶するのですが）、情報には構造があるということ伝えようと毎年試みるのではあります、やはり、難しいものです。

一次（の情報・資料）を圧縮して、いまで言うならばメタ化して二次が生まれ、二次はさらに三次へとメタ化される。原著論文、記事（一次）から書誌（二次）が生まれ、さらに「書誌の書誌」（三次）が作られる。「書誌の書誌」の存在は斯界の学術の進展の具合を測るバロメータである、と言ったのは誰だったでしょうか、谷沢永一でしたでしょうか。

逆に、三次（書誌の書誌）を見れば二次（書誌）が分かり、書誌から一次文献を見つけ出すことができる。という構造を踏まえることによって、いま自分が把握している情報と求めようとしている情報の性質の位置を測ることが、情報探索にとってキーになることを教わって、以来、習い癖になっています。

さて、インターネットの「検索」です。あのGoogleのぼっかりと空いた四角の窓に言葉を放り込み、そして返ってくる「結果」のリストには、この情報の次性が消え去っているように思われてなりません^{***}。一次も二次もそして三次も、すべてはランキングという論理のままに列挙されているところにおいては、この情報の次性も構造も熔解しているようです。

ロジェ・シャルチエは、『書物の秩序』『エピソード』において、「巻物状の書物（volumen）」に取って替わった書物の特殊な形態「冊子本（codex）」が「テキストの受容と理解の条件を変えてしまう」と書き、さらにインターネットにおいては、「テキストは本来の物質性から解放され」「書かれたものの伝播と領有の形態に革命が起こるか否かという問い」を迫っていると結んでいます^{***}。

インターネットの検索はともかく便利で何でも出てくるような気にもさせて、紙の書誌も索

引もすっかり忘れ去られようとしている昨今ですが、それは単に書誌を過去の遺物と見なすような愚挙であることに止まらず、シャルチエの言う『読書のプラチック（慣習行動）』の変容と同等かそれ以上の、思考のプロセスの変異が（向上か後退かそれはいまは不明ですが）、いままさに進行していることであるように思われてならないのです。

しかしながら、私個人として願うのは、いましばらくは、ジョンソン博士の言葉が有効である図書館の時代を生きていたいということであるのです。

^{*} 二〇〇五年三月十五日、藤川先生はカナダにて逝去されました。後に有志によって『ある図書館情報学研究者の軌跡 藤川正信先生への追憶』が刊行されています（つくば）
…藤川正信先生を偲ぶ会、二〇〇六

^{**} インターネット検索におけるこの不安をめぐって、アート・ドキュメンテーション学会は二〇〇七年、国立新美術館において「発現するドキュメンテーション 蓄積と検索から表現へ」というシンポジウムを企画しました。のちに故戸田光昭先生により本誌

四号にて評していただいております。

^{***} シャルチエ『書物の秩序』ちくま学芸文庫 一九九六 一七一―一七四頁

「スクリーン上の読書の流動性は、『水』のそれである」と冊子本の石のイメージに対比してディスプレイでの読書行為の変容を喝破したのは仏文学者の清水徹氏です。「パベルのあとで『書物について その形而下学と形而上学』岩波書店 二〇〇一

— 後 記 —

「ふぉーらむ」9号をお送りします。

遅い夏休みをとり地方旅行するのが、ここ数年の恒例行事になりつつあるのですが、景気低迷を反映しているのか、以前に比べて学生や鉄道ファンだけでなく、定年した団塊世代や若い女性が一人旅をしている光景を目にする機会が増えました。

今回図書館サポートフォーラム賞の受賞者が全て女性となったことは、名実ともに女性への世代交代が進みつつあることを感じさせます。同時に多数の人たちへの感謝を口にされているのが印象的でした。

「言挙げ」が足りないのではないかと思う業界だけに、普段日の目を見ない活動に光が当たることで、孤軍奮闘ではないことを感じてもらえればよいのですが。
(岩本)

第9号をお届けします。第14回図書館サポートフォーラム賞を受賞された稲葉洋子様・金沢幾子様・奥出麻里様、女性ご三方の受賞内容はタイムリーなお祝いでした。山ガール（最近は登山女子と呼ぶそうだ）・オリンピックでの日本女性の活躍といい、今の日本をリードすべきは女性の叡智であり腕力(?)ではないかと思うほどです。男社会の八方ふさがりが時代閉塞ならば、それに風穴を開けてください、女性の皆様。。。領土問題など直ぐ解決できそうな予感がします。

オロオロ歩く日照りの夏もお彼岸と共に去りぬ。しばし四季を楽しむ季節になりました。六義園に参りましょう。
(森本)

ふぉーらむ 第9号

2012年10月1日発行

発行人 山崎久道

製作 森本浩介／岩本謙一／齋藤香織

発行所 図書館サポートフォーラム

〒143-8550 東京都大田区大森北 1-23-8

日外アソシエーツ(株)内

TEL.03-3763-5241 FAX.03-3764-0845

http://www.nichigai.co.jp/lib_support/index.html

